

「天災は忘れた頃来る」のなりたち

初 山 高 仁*

The Formation Process of Japanese Aphorism “Disaster Will Happen When We Forget”

Takahito Hatsuyama

本稿では物理学者の寺田寅彦によるとされるものの文献的根拠は確認されていない「天災は忘れた頃来る」という警句がいかにかきあがったかをまとめている。関東大震災後に行われた議論を見てみると、寺田以外の者も忘却なり怠慢なりが災害の原因となると主張していたことが確認できる。サンフランシスコ地震の教訓がありはしたが、関東大震災では生かされなかったこともまた知れた。寺田は災害が忘れられることによって生じると随筆内で繰り返し述べているが、同時に災害を自然現象ではなく社会現象と見て、災害を起こさないためには教育の徹底が必要であると主張している。寺田の災害についての考えは、中谷宇吉郎によって通俗化された形で広められることになったが、「天災は忘れた頃来る」という表現は、社会現象としての災害についての寺田の主張を薄めたところがあると指摘した。

キーワード：寺田寅彦、中谷宇吉郎、澤柳政太郎、日下部四郎太、関東大震災

はじめに

「天災は忘れた頃来る」という警句は物理学者の寺田寅彦¹によるものと言われている。事実として、寺田は関東大震災の後の1923年9月29日付の小宮豊隆宛の書簡の中で次のように述べている。

「今度われわれのなめたと同じような経験を昔の人がもうとうになめ尽して居る。それを忘却してしまつて勝手な真似をして居た為にこんな事になつたと思う」²

これはあくまで私信での記述であり、これが社会に大きく広がったとは見なし難い。寺田の書いたものの中では似たような主張はあるものの、同じ記述は見つかっていない。ところで、寺田によるとされるこの警句には「天災は忘れた頃来る」、「天災は忘れられたる頃来る」、「天災は忘れた頃にやって来る」などといったようにバリエーションがある。高知県にある寺田寅彦記念館にある石碑では「天災は忘れられたる頃来る」が採用されている。国語辞典を見ても『広辞苑』では1991年の第4版の「天災」の項で「(天災)は忘れた頃にやって来る」と

2017年3月22日受理

* 尚綱学院大学 非常勤講師

の記述が現れ³、1998年の第5版以降ではこれが寺田寅彦の言葉であるとの解説がなされている⁴（この第5版では寺田寅彦記念館の「天災は忘れられたる頃来る」も併記されている）。『日本国語大辞典』では第2版（2001）から「天災は忘れたころに来る」「やって来る」と二通りの記述がなされ、「中谷宇吉郎が『一日一訓』に寺田寅彦のことばとして取り上げたのが初めという」⁵と解説されている。

寺田が殊に関東大震災後に災害についての研究を進めたことはよく知られた事実である⁶。人間の忘却が災害を引き起こすとの主張を寺田が随筆の中で何度も述べていることもまた事実である。したがって、「天災は忘れた頃来る」に近い言葉を寺田が口にしていただろうと推測できる。後述するように、寺田門下の者たちが表現に多少の違いはあっても同様に証言しているからには寺田が災害と忘却との関係について日頃から述べていたということはおそらく間違いない。

ただし、忘却が災害を起こすとの主張は、後述するように、関東大震災後に複数の人間が述べていたことでもある。本稿の目的は寺田以外の人間が寺田と同様の主張をしていたと述べることで、寺田の防災への努力を低く評価することにはない。寺田が防災について極めて重要な指摘をしてきたことは間違いないのであるから、むしろ、本稿の一つの目的は関東大震災後に現れた様々な主張が忘れられていることを指摘することにある。そして、このような指摘をすることで、寺田の主張の意義をも再認識したいと考えるのである。（本稿では旧字体や旧かな使いを現代的なものに改めて引用を行っているところがある。読みにくい漢字をかな表記に直しているところもある。）

1 関東大震災の経験から

関東大震災の翌月には幾種もの雑誌で関東大震災の特集号の企画がなされ、様々な見地から震災について語られている。その事例をここでいくつか取り上げてみる。

日本での相対性理論の最初の本格的な研究者であった石原純は「地震に関する対話」⁷で災害と忘却との関係について対話の形式をとりながら次のように述べている。

「A とうとう大地震がやって来ましたね。百年に一度ぐらいずつは関東地方にこんな地震が起るといことは歴史的に私達の経験したところでした。けれども個人的に経験のない現代の人達はほとんどそれを忘れて、一日の無事をいたずらに永遠に続かせようと望んでいます。私達は平生においてもっと多く天災に対して警戒の準備をしなくてはなりません。・・・

B ・・・自然に対する極大の恐怖は私達の心を浄めるものでなくて何でしょう。

A ほんとうにそうです。けれども愚な人間たちはじきにその苦しい体験を忘れて、もとの勝手な心に立ち戻ります」⁸

「A ・・・不慮の天災に対しては先ずそのあり得べきことを十分に予想してこれに備えなくてはなりません。天災は決して自然の怒りではないのです。かえって自然のより大なる調和を人間に教えるところのものです。天災を免れたことを、単に神冥の加護に帰して満足するのは、蒙昧時代の思想的遺物に過ぎません。それがたとえ不思議とも偶然とも

感ぜられるにしても、私たちはやはりその拠るところのあるのを信じなければならないのです。これを審らかに考えることは、後の同様な災禍に処するために資することが多いでしょう。この災変に出遇うたものは、その尊い経験を何に資するところもなく忘れてしまっ
てはなりません」⁹

このように石原は歴史的には経験されたことが個人的には忘れてられてしまうことを指摘し、常日頃の災害への警戒の必要性を述べている。「天災は決して自然の怒りではない」というのは恐らくは関東大震災を天譴（天罰）と見なす主張への反論であろう。

震災記念堂や築地本願寺の設計で知られる建築家の伊東忠太は次のように述べている。

「今次の大震に当りて、もしも市街の建築物が悉く堅牢で耐震的であったならば、その災害はあまり甚だしくはなかったと思う、従って大火も起らなかったかも知れぬ。世人がもしも真剣に火を恐れて、日常防火の用意を忘れなかったなら、あるいは今次の如き大火にはならなかったかも知れぬ。要するに激震の突発は科学者の言うが如く、全く予知すべからざる自然の現象ではあるが、その惨害を生ぜしめたのは世人の怠慢の為であると言うとも甚だしい過言ではあるまい」¹⁰

伊東は地震のような自然現象は予知できないとしても災害は日常の対応を怠らなければ防ぐことができるとの見方を示した。関東大震災後には、渋沢栄一を代表として震災が浮ついた世情に対する天譴であるという災害の自然科学なり社会科学なりによる分析を無視する主張が珍しいものではなかった¹¹わけだが、これらとは異なる形で石原や伊東といった科学的知見を持った者たちにより忘却や怠慢が災害を起こすと主張されていたのである。

インド哲学の研究で知られる木村泰賢は、「天譴にあらざる自業自得」として次のように述べている。

「人力を以て予防し難き不測の天災ではあるけれども、また深刻たる意味においては吾人の不注意の結果であるということも出来る。即ち吾等は従来、余りに自然の平和的方面にのみ慣れてその戦闘的方面を忘却し、それに対する防御を忘れた報いと解することが出来るのである」¹²

木村は天災が単なる自然現象ではなく人間の忘却に対する報いであると見ている。木村はこれに加えて震災からの復興のためには科学的精神が必要であるとも主張している¹³。

ここまででは石原、伊東、木村の見解を見てきたが、人間が意識を疎かにするとことで災害が産まれるのだから、科学的な対応が必要との主張が専門分野の異なる者らからなされていたことがわかる。

2 アメリカ発の災害論

関東大震災が起った当時の科学雑誌である『科学知識』には、関東大震災後に教育学者の澤柳政太郎による「災害と教育」と題する論考が掲載されている。ここで澤柳は次のように述べ

ている。

「二三週間前に中央気象台の中村理学博士から興味のある話を聞いた。同博士が大震後に受取ったアメリカの地震学会の報告の中に、ある学者が千九百六年のサンフランシスコの大震火災について、あの損害は地震もしくは火事の結果と言うよりも、人間の怠慢 (Negligence) と不注意 (Carelessness) とに依って、サンフランシスコは破壊されたと言すべきであるということであった。こういう話を中村理学博士から承わもた。関東の震災火災はその禍もアメリカの学者の口吻を真似る訳ではないが、寧ろ人の不注意や怠慢によって起った禍であると言っても宜くはないであろうか。尚自分は怠慢と不注意との外に無智 (Ignorance) 主として科学上の知識に乏しき事と、責任心の缺乏より生じたものが多大であると思う」¹⁴

澤柳の論述は1906年のサンフランシスコ地震を踏まえてのものである。「ある学者」が災害の発生について怠慢と不注意を問題にするのに加え、澤柳は教育学者らしく無智を災害の原因とし、これを克服するための教育の重要性を説いている。ところでここでの「中央気象台の中村理学博士」とは寺田門下の一人である中村左衛門太郎のことである。中村は関東大震災の翌年に刊行した書である『地震』の末尾で次のように述べている。

「私はカリフォルニアの断層図の説明にベリー、ワイリス氏がサンフランシスコ地震の被害を評した言葉を次に引用して読者諸君が大正十二年の過を再びせられざらむ事を希望いたします。同年関東大震災に際して圧死者の数は恐らく一万六千人であって残り八万余人は焼死者であったときかかれたら読者の内には思い半に過ぎない方もありましょう。

『一九〇六年の地震はサンフランシスコを破壊したのでは無いというが、実に閑却と不注意とが同市を破壊したものである。』¹⁵

ここで言われる、「ベリー、ワイリス氏」とは関東大震災時にアメリカ地震学会の会長であったウィリス (Bailey Willis) のことであろう。ここでは中村のように、寺田と直接の関わりがあった物理学者の書いたことであっても寺田のものとされる「天災は忘れた頃来る」についての言及はない。中村がこのように述べた1924年の時点では「天災は忘れた頃来る」との言葉が寺田によるものであるとの評判はまだなかったと見なしてよいだろう。

中村が知り澤柳に伝えたウィリスのサンフランシスコ地震についての見解がどのようなものであったかを次に確認してみる。1906年のサンフランシスコ地震は人口周密地を襲った災害として知られており、地震そのものによる家屋の倒壊よりも、地震後の火災による死者数のほうが多い災害であった。いわば関東大震災のプロトタイプとでも言うべき災害だったのである。中村のいう、「カリフォルニアの断層図の説明」とはウィリスによる論文「カリフォルニアの断層地図」¹⁶のことであろう。この1923年3月の論文でウィリスは次のように述べている。

「サンフランシスコでは1906年の地震が都市を破壊したのではないといえる。このように主張して全く問題ないだろう。怠慢 (negligence) と不注意 (carelessness) が都市を破壊したのである。もし人が過去の経験から推測し、もし火を防ぎ火を消すための適切で実

際的な予防措置がとられていたならば、たとえ脆弱に建設されていた建物が倒壊したとしても、大災害などなかったであろう。火が都市を燃やし尽くしたという事実は、告発なのであって弁解ではない」¹⁷

このウィリスの述べたようなサンフランシスコ地震から得られた教訓が活かされることなく約半年後に関東大震災が起る事態となったのである。

ここまで述べてきたように忘却や怠慢が災害を起こすとの主張が関東大震災の後に幾通りにかなされていた。しかもこれらの論者は寺田に言及していない。澤柳や中村の述べることを寺田が読んでいたかどうかを確認するすべはないし、本稿は澤柳や中村が寺田に影響を与えたと主張するものでもない。本稿の目的はむしろ寺田と同様な主張が様々になされていたということを示すことにある。ここまででは石原、伊東、木村、澤柳、中村そしてウィリスの事例を述べただけだが、忘却や怠慢を災害の原因とする主張はある範囲の識者の間ではなされていたと見ることができる。寺田の災害についての考えはこうした状況の内で醸し出されたでも言ったほうが適切ではないだろうか。

3 災害防止の課題

関東大震災後に忘却や怠慢が災害を引き起こすとの主張が寺田以外からもなされていたことはここまでで確認できた。しかし、寺田が1930年代に入ってもなお災害について論じ続けていたことは他と異なる特徴である。1930年代に寺田が災害防止のために何が課題であるとしていたかをここでまとめてみる。

(1) 火事教育の課題

ウィリスの言葉を中村を通じて受取った澤柳は先述の「災害と教育」を掲載した『科学知識』の翌月の号に「火災に対するの観念に就いて」¹⁸と題する論考を書いている。ここで澤柳は「火事に対する考を慎重にするには社会一般の注意を促す事も必要であるが教育上においても注意する所がなければならぬ」としてニューヨークでの教育を視察した際に入手した児童向けの火の用心の冊子¹⁹について述べている。澤柳はこれを震災前に「ある大都会の教育課の主任」に渡したがこれは無視されてしまった²⁰。澤柳はこれを踏まえて「誠にニューヨーク市の注意の極めて周到なる事に感心を致した」とまとめている²¹。したがって澤柳にとって日本で「不注意」と見なされる具体例の一つは火災についての教科書が無くしたがってろくな火事教育が行われていないことということになる。

寺田もまた澤柳と同じ問題意識を持っていたと見える。寺田は1933年に書かれた随筆「火事教育」のなかで火災について「これに処する根本的対策としては小学校教育ならびに家庭教育において児童の感受性ゆたかなる頭脳に、鮮明なるしかも持続性ある印象として火災に関する最重要な心得の一般を固定させるよりほかに道はないように思われる」²²と述べた。この上でロシアの子供向けの防火についての絵本を事例として取り上げ、日本でもこのような絵本が必要であるとまとめている。ここにおいて澤柳と寺田は問題をほぼ共有していたと見なせる。ただし、寺田のこの随筆内の次の主張は澤柳の考えを一步進めている。

「火事は人工的災害であって地震や雷のような天然現象ではないという簡単明瞭な事実すら、はっきり認識されていない。火事の災害の起こる確率は、失火の確率と、それが一定時間内に発見され通報される確率によって決定されるということも明白に認められていない。火事のために日本の国が年々幾億円を費やして灰と煙を製造しているかということを知る政府の役人も少ない。火事が科学的研究の対象であるということを考えてみる学者もまれである」²³

寺田においては火災が自然現象ではないこと、教育されるべきなのは子供だけではないことははっきりと認識されていたとでもいえようか。災害は忘れることによって生じるが、忘れないためにいかなる社会的対応が必要かということまで寺田は踏み込んで見なすべきである。

(2) 文明と災害

寺田は「火事が科学的研究の対象であるということを考えてみる学者もまれ」と述べたわけだが、その「まれ」な学者の一人は物理学者の日下部四郎太で、彼と寺田とは旧知の間柄であった。日下部は関東大震災以前から火災の予防についての一般向けの書『通俗講話 火及び火災』²⁴を著すなどしており、災害についての科学的対応を論じていた学者の一人である。日下部は関東大震災から一年を経ずに急死したが、その遺稿である『地震学汎論』で次のように述べている。

「地震の恐るべき事、即ち震災の程度は目下のところ文明の程度と共に増進している。殊に理学的基礎を有せざる文明国の大都市にありては、その被害甚だ大にして到底古人の想像だも成し得ざる所である」²⁵

寺田は有名な随筆である「天災と国防」(1934)の中で次のように述べている。

「ここで一つ考えなければならないことで、しかもいつも忘れられがちな重大な要項がある。文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増すという事実である」²⁶

両者とも、文明の発展とともに災害が激化しているとの主張である。ではなぜそうなるのか。日下部は次のように述べている。

「際限もない深林の内に一二の茅屋を建てて生活せる南米の土人や、台湾の生蕃には、如何なる大地震も空吹く風と同様に看過されるのが自然の理である。彼等はこれによって失うべき何ものも持ち居らぬのである」²⁷

寺田もまた次のように述べている。

「人類がまだ草昧の時代を脱しなかつたころ、岩丈な岩山の洞窟の中に住まっていたとす

れば、たいていの地震や暴風でも平気であったろうし、これらの天変によって破壊さるべきなんらの造営物をも持ち合わせなかったのである」²⁸

災害が破壊しているのは自然よりもむしろ人工物であるから、人間は自然現象によって破壊されるものをわざわざ作っているとでもいえようか。ここで筆者は誰が先に主張したかということの問題にしようとしているのではない。関東大震災後にある学者たちの間で同様の問題意識が持たれていたということを主張したいのである。災害は自然現象ではなく、人間の活動こそが自然現象を災害へと発展させている。いわば、地震は自然現象であるが、地震にともなう災害は社会現象であるとの主張と見なせる。寺田が災害を社会現象と見たうえで、いかに災害に対応すべきと考えたかを次に確認することにする。

(3) 社会現象としての災害

ここまで述べてきたことを踏まえながら寺田の随筆のあらためて読んでみると、寺田は随筆という形をとりながら、災害に対する無策さを繰り返し論じていることがわかるとともに、災害に対しては教育によって対応しなければならないと述べていることがわかる。災害に対しては研究することも重要だが、これを回避するためには教育がなおさら必要であるということだろうか。寺田は死後にまとめられて出版された岩波新書『天災と国防』に載録された随筆の中だけでも次のように述べている。

「日本国民のこれら災害に関する科学知識の水準をずっと高めることが出来れば、その時に初めて天災の予防が可能になるであろうと思われる。この水準を高めるには何よりも先ず、普通教育で、もっと立入った地震津波の知識を授ける必要がある」（『津波と人間』、1933）²⁹

「政府でも火災の軽減を講究する学術的機関を設ける必要のあることは先述の通りであるが、民衆一般にももう少し火災に関する科学的知識を普及させるのが急務であろうと思われる。少なくともさし当たり小学校中学校の教程中に適當なる形に於て火災学初歩のようなものを挿入したいものである」（『函館の大火に就て』、1934）³⁰

「台風中心の進行速度と、風の速度とを間違えて平気である人も中々多いようである。これは人々の心がけによることであるが、しかし大体に於て学校の普通教育ないし中等教育の方法に重大な欠陥がある為であろうと想像される」（『颱風雜俎』、1935）³¹

寺田はこれらの随筆の中で災害についての研究機関の設置や観測網の整備の必要性などについても述べているが³²、これは今日ではかなり実現されているといえる。しかし、教育についてはいまだ十分なものがあるとは言い難い状況であろう。寺田はまた次のような重要な指摘もしている。

「『地震の現象』と『地震による災害』とは区別して考えなければならない。現象の方は人間の力でどうにもならなくても『災害』の方は注意次第でどんなにでも軽減され得る可能

性があるのである」(「災難雑考」、1935)³³

「あらゆる災難は、一見不可抗的のようであるが実は人為的のもので、したがって科学の力によって人為的にいくらでも軽減し得るものだという考えをもう一遍ひっくり返して、結局災難は生じ易いのにそれが人為的であるが為に却って人間というものを支配する不可抗な方則の支配を受けて不可抗なものであるという、奇妙な廻りくどい結論に到達しなければならぬことになるかも知れない」(「災難雑考」、1935)³⁴

このように寺田は自然現象と社会現象とをきっちりと区別している。そして災害が社会現象であるからこそ、これへの対応は自然現象のように単純ではないということになるのだろう。ただし、寺田が「人為」なり「人間」なりと語るにあたり、人間一般なのか一部の人間なのかを区別し得ていたかは、この文章だけでは判断し兼ねる。しかし、ともかくも災害が何故に生じるのか、何故に防げないのかということについて寺田が重要な指摘をしていることは間違いない。災害は自然現象ではなく社会現象なのであるから、これへの対応は自然を研究するだけでは足りず、教育の拡充と社会分析がなければならないということになる。

4 中谷宇吉郎による随筆「天災は忘れた頃来る」

矢島祐利は寺田の稿をまとめて1938年に出版した岩波新書の『天災と国防』の「後記」で次のように述べている。

「先生は地震や津波や火事などについて、人がもし冷静に科学的にこれに処したならばどんなにその惨禍を軽く出来るかについてしばしば書かれた」³⁵

本稿でここまで述べてきたことをふまえると、この矢島の1938年の時点でのまとめかたは適切なものである。寺田が口にしていた言葉もこの程度のものであったのではあるまいか。しかしまた同年に、ある意味で寺田の考えを簡潔にまとめた言葉が広がっていくことになる。その過程を次に見ていくことにする。

中谷宇吉郎は1955年に「天災は忘れた頃来る」と題する随筆を発表している³⁶。中谷はこの随筆内で自身のかつて書いた新聞記事について次のように述べている。

「十五年ばかりも昔の話になるが、たしか東京日日新聞だったかに頼まれて『天災』という短文を書いたことがある。その文章の中で、私はこの言葉を引用(?)して『天災は忘れた頃来る』という寅彦先生の言葉は、まさに千古の名言であると書いておいた」³⁷

「ところが、この言葉が、その後方々で引用されるようになり、とうとう朝日新聞が、戦争中に、一日一訓というようなものを編集した時、九月一日の分に、この言葉が採用されることになった」³⁸

これら中谷の記述を新聞の記事内容と突き合わせて確認してみる。まず、中谷は「十五年ば

かりも昔、「東京日日新聞だったか」としているが、これはおそらくは中谷の記憶違いか何かで、東京日日新聞ではなく1938年の朝日新聞に中谷の記事が確認できる³⁹。ここで中谷は記事を次のような言葉で始めている。

「天災は忘れた頃に来る。

これは寺田寅彦先生が、防災科学を説く時にいつも使われた言葉である。そしてこれは名言である」

「いつも使われた言葉」にしては表現にぶれがあるのがこの言葉である。中谷が「朝日新聞が、戦争中に、一日一訓というようなものを編集した時、九月一日の分に、この言葉が採用されることになった」と述べているのは1944年の朝日新聞での記述である⁴⁰。ここでは次のように述べられている。

「天災は忘れられた頃に来る 寺田寅彦」

1938年の表現とは微妙だが違いがある。ところで、1955年の随筆の冒頭で中谷は次のように述べている。

「今日は二百二十日だが、九月一日の関東大震災記念日や、二百十日から、この日にかけては、寅彦先生の名言『天災は忘れた頃来る』という言葉が、いくつかの新聞に必ず引用されることになっている」⁴¹

筆者は朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の三誌のデータベースを参照したが、この三誌に限ったことではあるが、1955年までに「必ず引用される」ということは現状の検索機能と筆者の検索能力では確認できなかった。むしろ確認できたのは中谷が上述のように朝日新聞で2回記事を書いていたことと、1951年7月13日と1953年7月21日の読売新聞に記載があることのみである。（地方紙まで範囲を広げると違う結果の出る可能性はある。中谷の1955年の随筆はそもそも西日本新聞に掲載されたものである。）

1951年7月13日の読売新聞では次のように述べられている。

「天災が『忘れたころ』にやって来た、寺田寅彦博士の生きていた時代の日本はまだまだ幸福だったといえる。このごろときた日には天災は忘れるヒマもないほど頻繁にあとからあとからやって来る」⁴²

この記事からすると「天災は忘れたころにやって来る」という文句が寺田寅彦によるものとの評価がかなり定着していたものと見なせる。1953年7月21日の読売新聞では子供向けの記事の中で次のように述べられている。

「『天災は忘れたころにおこる』といって、ゆだんをいましめたのは、寺田寅彦（てらだ・とらひこ）という人ですが、みなさんも往來の電車や自動車に気をつけましょう」⁴³

こちらでは「天災は忘れたころにおこる」が寺田の言葉とされている。筆者の管見の範囲では中谷の1938年の記事以前に寺田が「天災は忘れた頃来る」に近い言葉を述べたと見なせる事例は現状では見当たらない。大森一彦もこの記事を「〈天災は忘れた頃に来る〉という警句についてもっとも早く書かれた文章」と評している⁴⁴。中谷の記述にしても、

「天災は忘れた頃に来る」(1938)

「天災は忘れられた頃に来る」(1944)

「天災は忘れた頃来る」(1955)

といったようにぶれがあり、本当に寺田が「いつも使われた言葉」なのかという疑問を持たざるを得ない。似たようなことは何度も言っていたが、特定の言い方はされていなかったと見なすのが自然ではあるまいか。中谷は1955年の随筆の中で「私も、この言葉が先生の書かれたものの中にあるものと思い込んでいた」、「坪井忠二博士なども、初めはこの言葉が、寅彦の随筆の中にあるものと思い込んでいたそうである」と述べているので、門下の中谷と坪井ですら寺田から直接聞いた言葉ではないとも見なしうる。

中谷以外の寺田門下の者たちの証言についても確認してみる。藤岡由夫は1942年に寺田が「『天災は忘れられた頃に来る』との警告を度々発しておられた」⁴⁵と述べている。これを見ると藤岡の1942年の記述に合わせて中谷が1944年に書いているようにも見える。藤岡はさらに1959年に「『天災は忘れたころくる』 - これは寺田先生の名言として知られている」⁴⁶と書いているが、今度は藤岡のほうが中谷の1955年の記述に合わせているかのようである。

宇田道隆は「『天災は忘れた頃に来る。』という言葉は先生の口から出たのである」⁴⁷と1948年の時点で述べている。宇田はまた「『天災は忘れた頃に来る』と云う有名な言葉は先生に由来するものである」⁴⁸と1948年の別の著でも述べている。これは中谷の1938年の表現と一致している。和達清夫は1975年になってだが「『災害は忘れた頃来る』というのは、寺田寅彦の言葉としてよく世の中に知られている」⁴⁹と述べている。寺田門下の和達であっても、「災害は」と中谷とは異なる表現をしている。しかしそれでいて、「忘れた頃来る」の方は中谷の1955年のものにむしろ一致している。中谷、藤岡、宇田、和達は影響し合いながら寺田の考えを表現しているかのようである。

以上をふまえると、少なくとも、寺田本人が「天災は忘れた頃来る」という定まった表現を公言してはいなかったことは確かでないだろうか。寺田が、災害を忘れることが災害を起こすという主旨のことを述べているのは間違いないが、警句としての「天災は忘れた頃来る」に類した簡潔な表現はむしろ中谷を代表とする門下の者らがある程度は意図せずにまとめたところがあるのではないだろうか。

だが、寺田の災害についての考えをこのような単純な言葉として代表させたことは、むしろ寺田が述べていた災害の防止のための教育の必要性や社会現象としての災害の理解について忘れることになってはいないだろうか。災害は社会現象なのであるから教育の徹底によりこれを避けなければならないとの考えは、「天災は忘れた頃来る」との表現からは見出しにくい。上述の読売新聞での1950年台の記事内容を見るとなおさらそう思える。

おわりに

ジャーナリストの宮武外骨は関東大震災を天譴（天罰）とする説に対して「自然科学を解しない野蛮思想の有害論」とした上で「虚業家渋沢栄一が天譴説を唱えたに対し、文士菊池寛が『天譴ならば栄一その人が生存するはずはない』と喝破したのは近來の痛快事であった」⁵⁰と述べた。天譴説が、災害の自然科学や社会科学による分析をそもそも行おうともしない暴論であることはこの短い文章からも知れることである。ところで、2011年の東日本大震災の後にはこれを天罰とする発言がどこかの都道府県の知事からなされた。歴史を忘れ歴史に学ばなければこうした知事ができあがるということなのだろう。

本稿では「天災は忘れた頃来る」という言葉の成り立ちを基本軸としながら、日本で関東大震災後に災害について何が論じられたかをまとめてきた。この結果として忘却なり怠慢なりが災害を激化させるとの考えは寺田だけでなく、様々な者たちが論じていたことであると確認できた。

寺田が他と異なるのは、関東大震災から10年以上を経た1930年代になっても忘れることなく災害を論じ続けたところにある。寺田は災害を自然現象ではなく社会現象であるとして、科学に基づいた教育によって災害を起こさない方策を模索していたのだろうと考えられる。このように見ると、「天災は忘れた頃来る」という言葉は門下の者たちの証言からすれば寺田によるものと言えるのかもしれないが、しかし、ここまで述べてきた事実をふまえると、この言葉を寺田のものとするのは、関東大震災後になされた様々な議論を忘却した結果だともいえる。また、「天災は忘れた頃来る」という言葉をもって寺田の災害についての見解を代表させることはむしろ寺田が述べてきたことを忘却することになりはしまいか。

寺田とは旧知の物理学者である日下部四郎太は、理学的根拠のあることが、社会の必要性から文学的な形態に置き換えられて通俗化し、やがてそもそもの意義が忘れられてしまうといった主旨のことを述べたことがある⁵¹。関東大震災や昭和三陸大津波、函館大火といった苦い記憶は寺田の随筆という文学的形態となり後々へと伝わることになった。さらには「天災は忘れた頃来る」という警句もできあがり寺田の考えはさらに広く知られることとなった。しかし、広く知られることにより忘れられたこともまた多々あるのではないだろうか。

本稿をまとめるにあたっては東北大学図書館所蔵の『関東大震災関係雑誌』が非常に役立った。これは関東大震災後に刊行された雑誌の震災特集号を集めたものであるが、これを集めたのは東北大学図書館の狩野文庫で知られる狩野亨吉のようである。おそらくは狩野が震災の記録を後世に伝えようと意図したものであろう。ところが、筆者の知っているところではこの狩野が収集した関東大震災についての資料は現状（2017年3月）では狩野文庫のみにまとめられてはおらず、雑誌⁵²なり図書⁵³なりとしてばらばらに所蔵されている。これはもしかすると狩野が資料を収集した意図が忘れられた結果なのかもしれない。

過去と現在との関係をどのように見るか。これは歴史学の根本的な課題である。過去を忘れないということは重要な課題であるが、過去に示された課題をいかに引き継ぎ解決するかはより重要な課題であるともいえる。寺田の示した課題は「忘れない」ということだけではないはずである。

昨年（2016年）末に糸魚川市で大火が発生した。過去の大火の教訓から市では消火のための用水路が整備されていたが、この目的は為政者には忘れられて、水路は商業用地確保のため

に蓋をされ、消火のためには使えない状態であったらしい⁵⁴。寺田のいう「災難は生じ易いの
にそれが人為的であるが為に却って人間というものを支配する不可抗な方則の支配を受けて不
可抗なものであるという、奇妙な廻りくどい結論」がまた繰り返されたということだろうか。
狭い視野をもって見れば、災害を積極的に忘れることは利益への早道なのである。この上で災
害を天譴なり天罰なりといえ、誰かが責任を問われることもない。寺田がある程度まで見抜
いたこの「方則」を忘れてはなるまい。

-
- ¹ 本稿をまとめるにあたって寺田寅彦については大森一彦編、『寺田寅彦』、日外アソシエーツ、2005にま
められた文献目録が極めて役立った。
- ² 『寺田寅彦全集』、27巻、岩波書店、1999、p.63。
- ³ 『広辞苑』、第四版、岩波書店、1991、p.1783。
- ⁴ 『広辞苑』、第五版、岩波書店、1998、p.1851。
- ⁵ 『日本語大辞典』、第二版、第9巻、小学館、2001、p.788。
- ⁶ 寺田の多岐にわたる災害研究については小林惟司、『寺田寅彦と地震予知』、東京図書、2003で詳しく述べ
られている。
- ⁷ 石原純、「地震に関する対話」、『女性改造』、大震災記念号、1923.10、pp.28-33。
- ⁸ 同上、pp.28-29。
- ⁹ 同上、p.33。
- ¹⁰ 伊東忠太、「畏るべき天の威力」、『科学知識』、3巻10号、1923.10、p.4。
- ¹¹ その解りやすい一例として、近松秋江、「天災に非ず天譴と思へ」、『改造』、大震災号、1923、pp.216-219を
あげておく。
- ¹² 木村泰賢、「災害と其道徳的意義」、『太陽』、29巻11号、1923.11、p.97。
- ¹³ 同上、pp.98-99。
- ¹⁴ 澤柳政太郎、「災害と教育」、『科学知識』、4巻1号、1924.1、p.5。
- ¹⁵ 中村左衛門太郎、『地震』、生活文化研究会、1924、pp.231-232。
- ¹⁶ Bailey Willis: "A Fault Map of California," *The Bulletin of the Seismological Society of America*, vol.XIII,
No.1, March, 1923, pp.1-12.
- ¹⁷ Ibid., p.12.
- ¹⁸ 澤柳政太郎、「火災に対するの観念に就いて」、『科学知識』、4巻2号、1924.2、pp.2-5。
- ¹⁹ National Board of Fire Underwriters, *Safeguarding the Home Against Fire a Fire Prevention Manual for
the School Children of America*, United States Bureau of Education, 1920.
- ²⁰ 澤柳、「火災に対するの観念に就いて」、前掲、pp.4-5。
- ²¹ 同上、p.5。
- ²² 寺田寅彦、「火事教育」、『寺田寅彦全集』、第7巻、1997、p.282。
- ²³ 同上、pp.282-283。
- ²⁴ 日下部四郎太、『通俗講話 火及火災』、内田老鶴圃、1913。
- ²⁵ 日下部四郎太、『地震学汎論』、内田老鶴圃、1927、pp.1-2。
- ²⁶ 寺田寅彦、「天災と国防」、『寺田寅彦全集』、第7巻、1997、p.313。
- ²⁷ 日下部、前掲、『地震学汎論』、p.2。
- ²⁸ 寺田寅彦、前掲、「天災と国防」、p.313。
- ²⁹ 寺田寅彦、「津波と人間」、『寺田寅彦全集』、第7巻、p.293。
- ³⁰ 寺田寅彦、「函館の大火に就て」、『寺田寅彦全集』、第7巻、p.309。
- ³¹ 寺田寅彦、「颱風雑俎」、『寺田寅彦全集』、第7巻、p.338。
- ³² 寺田寅彦、「函館の大火に就て」、前掲、p.305、「颱風雑俎」、前掲、p.333など。
- ³³ 寺田寅彦、「災難雑考」、『寺田寅彦全集』、第7巻、pp.343-344。
- ³⁴ 同上、p.352。
- ³⁵ 矢島祐利、「後記」、寺田寅彦、『天災と国防』、岩波書店、1938、p.197。

- ³⁶ 中谷宇吉郎、「天災は忘れた頃来る」、『中谷宇吉郎随筆選集』、第3巻、朝日新聞社、1966、p.80。
³⁷ 同上。
³⁸ 同上。
³⁹ 中谷宇吉郎、「天災」、『朝日新聞』、1938.7.9、p.7。この記事は『中谷宇吉郎随筆選集』、第1巻、朝日新聞社、1966、pp.388-389に記載されている。
⁴⁰ 中谷宇吉郎、「国民座右銘」欄、『朝日新聞』、1944.9.1、p.1。
⁴¹ 中谷、前掲、「天災は忘れた頃来る」。
⁴² 「編集手帳」欄、『読売新聞』、1951.7.13、朝刊、p.1。
⁴³ 「少年少女」欄、『読売新聞』、1953.7.21、夕刊、p.4。
⁴⁴ 大森一彦、前掲書、p.56。
⁴⁵ 藤岡由夫、「科学者のことば」欄、「天災は忘れられた頃に来る－寺田寅彦－」、『科学朝日』、朝日新聞社、第2巻12号、1942.12、p.35。
⁴⁶ 藤岡由夫、「寺田寅彦 25年忌に際して」、『朝日新聞』、1959.12.10、朝刊、p.7。
⁴⁷ 宇田道隆、『寺田寅彦』、弘文堂書房、アテネ文庫、1948、p.30。
⁴⁸ 宇田道隆、『寅彦先生閑話』、弘文堂、1948、p.198。
⁴⁹ 和達清夫、「謙虚に自然と人とを－寺田寅彦先生の追想－」、『科学者 寺田寅彦』、宇田道隆編著、日本放送出版協会、1975、p.22。
⁵⁰ 宮武外骨、『震災画報』、第三冊、1923.11、p.41。
⁵¹ 日下部四郎太、『信仰仏利 二人行脚』、大日本雄弁会、1919、pp.2-3。
⁵² 『関東大震災関係雑誌』は東北大学図書館2号館の雑誌と分類されている。
⁵³ 宮武外骨による『震災画報』は書庫に所蔵されている。
⁵⁴ この記述はテレビ朝日系列の「テレメンタリー 2017」枠で放送されたUX新潟テレビ21制作による「大火再び… 新潟・糸魚川からの警告」（宮城県では東日本放送により2017年2月15日に放送）の内容を根拠としている。